

天声人語

叙情あふれる詩を残した三好達治に「灰が降る」と題する異色作がある。短い言葉を連ねた28行の詩の最後は、こんなふう

に結ばれる。へお月さまが／囁いた／昔々あの星に／伶俐な猿が住んでゐた。はて、どういふことか

▼灰とは核兵器による死の灰のこと。詩の中の「死の総計の灰をまく／とんだ花咲爺さん」は核実験に血道を上げる大国であろう。人類は核で滅び、お月様が地球を眺めて言うのが結びの言葉である

▼その詩から半世紀以上。冷戦も終結して長いのに、人類は歩みを止めたかのよう核不拡散条約（NPT）会議の決裂である。最終文書を採択できずに閉幕となり、核廃絶をめざす人々の失望は深い

▼国際社会を見回せば、核兵器は大きな顔をしたままだ。米ロ英仏中の核保有国は今回、核兵器禁止条約の記述に強く反対し、文言は削除された。この5カ国は国連安保理を常任理事国として支配している。岩盤のような「既得権」といえる

▼6年前、「核なき世界」を高らかに唱えたオバマ大統領がノーベル平和賞を受けた。そのとき三好のこんな逸話を小欄で引き合いにした。校歌の作詞を頼まれたが断り、その理由を「僕が校歌を作った、このさき心中でもしたら、学校の生徒は散々だ」と語ったそうだ▼希望に満ちた校歌ならぬ名演説を「先物買い」したノーベル賞に、一抹の不安を呈するコラムだった。あのと時の世界の熱気は散々に裏切られて終わるのか。現実と切り結ぶ理想であれど、願いたい。